武蔵野日曜聖書講筵

神殿宗教

――エレミヤ記第７章１～20節――

１９７４年４月21日
小池辰雄

ヨシヤの宗教改革　エルサレム神殿中心　盗賊の巣　とりなしをなす勿れ　真の礼拝者　霊と真とをもて拝す　御霊にある砕け　神および羔羊はその宮

【エレミヤ７】

1 エホバよりエレミヤにのぞめる言云う 2 汝エホバの室の門にたち 其処にてこの言を宣て言え エホバを拝まんとてこの門にいりしユダのすべての人よエホバの言をきけ 3 万軍のエホバ、イスラエルの神かくいい給う 汝らの途と汝らの行を改めよ さらばわれ汝等をこの地に住ましめん 4 汝ら是はエホバの殿なりエホバの殿なりエホバの殿なりと云う 偽の言をたのむ勿れ 5 汝らもし全くその途と行を改め 人と人との間を正しく鞫き 6 異邦人と孤児と寡婦を虐げず 無辜者の血をこの処に流さず 他の神に従いて害をまねかずば 7 我なんじらを我汝等の先祖にあたえしこの地に永遠より永遠にいたるまで住ましむべし

8 みよ汝らは益なき偽の言を頼む 9 汝等は盗み殺し 姦淫し 妄りて誓いバアルに香を焚き 汝らがしらざる他の神にしたがうなれど 10 我名をもて称えらるるこの室にきたりて 我前にたち 我らはこれらの憎むべきことを行うとも救わるるなり というは何にぞや 11 わが名をもて称えらるる此室は汝らの目には盗賊の巣と見ゆるや 我も之をみたりとエホバいいたもう

12 汝等わが初めシロに於て我名を置きし処にゆき 我がイスラエルの民の悪のために其処になせしところのことをみよ 13 エホバいいたもう 今汝ら此等のすべての事をなす 又われ汝らに語り 頻にかたりたれども聴かず 汝らを呼びたれども答えざりき 14 この故に我シロになせしごとく我名をもて称えらるる此室になさん すなわち汝等が頼むところ我汝らと汝らの先祖にあたえし此処になすべし 15 またわれ汝等のすべての兄弟すなわちエフライムのすべての裔を棄てしごとく 我前より汝らをも棄つべし

16 故に汝この民のために祈る勿れ 彼らの為に歎くなかれ 求むるなかれ 又我にとりなしをなす勿れ われ汝にきかじ 17 汝かれらがユダの邑とエルサレムの

街になすところを見ざるか 18諸子は薪を拾め 父は火を燃き 婦は麺を捏ね
パンをつくりて之を天后にそなう 又かれら他の神の前に酒をそそぎて我を怒
らす 19エホバいいたもう 彼ら我を怒らするか 是れおのが面を辱むるにあら
ずや 20是故に主エホバかくいいたもう 視よわが震怒とわが憤怒はこの処と
人と獣と野の樹および地の果にそそがん 且燃えて滅ざるべし

●ヨシヤの宗教改革

1エホバよりエレミヤにのぞめる言云う 2汝エホバの室の門にたち 其処に
てこの言を宣て言え エホバを拝まんとてこの門にいりしユダのすべての人よ
エホバの言をきけ

少し前後の状況をいうと、エレミヤという預言者は、ユダの王ヒゼキヤの次のマナセというのがありまして、マナセという王は紀元前697年から641年――大体ですが――その645年位に、即ちマナセの王の晩年の7世紀の半ばころに祭司ヒルキヤの子としてベニヤミンのアナトテに生まれた。日本でいうと神武天皇のあたりの頃です。マナセの後のアモンというのは2年位で殺された。その次はヨシヤ。ヨシヤという王さまは注目しなければならない。これが紀元前639年から608年位。エレミヤが預言者として立たされたのが626年と普通言われています。まだ青年です。だから、

「私は語ることがまだまだ出来ませんから」

と。20歳前後ですから。ところが、

「私がお前の口の中に預言を入れるので、遠慮は要らん」

というので、立たしめられたわけです。君たちも、本当に神の召命を受けたら、伝道を始めたっていいわけです。

このヨシヤ王のときに、紀元前621年、これも大事な年号だから覚えてもらいたい。621年に「申命記」が神殿で発見された。そこでこの申命記法によって――申命記法は申命記の大部分です――それを基準にして宗教改革をこのヨシヤがする。この宗教改革というのが、エルサレム神殿中心の宗教です。神殿を唯一の聖所として、他の聖所は認めない。他の礼拝所は認めない。エルサレム神殿に絶対権を与える。ちょうどローマン・カトリックみたいな調子だ。全国の者がここに来て礼拝をする。ちょうどマホメット教のメッカみたいなものです。非常に宗教的な統一をするわけです。それを「宗教改革」と一応言うけれども、果たしてそれが本当の宗教改革かということが、エレミヤの問題になるわけです。今日のところの「神殿宗教」というのはそういうわけですから。

少し先のことをいうと、カルデヤ――即ちバビロン、新バビロニヤ――カルデヤとメデヤの連合軍がアッシリヤをやっつけた。そして、ニネベが陥落したのが612年――昔は611年とも言われていたが――さっきの621を引っくり返すと612になる。

まぁ大事な年号は覚えておいてください。私も昔、高等学校の入学試験を受ける時に西洋史をよく勉強して、実によく――年号を覚えることが何もいいのではないけれども――今でも私は、記憶の悪いやつがよくもあれだけ覚えたと思って感心したくらいです。あなた方は若いんだから、すぐ覚えてしまう。

612年にこのアッシリヤのニネベが落ちた。ヨナ書がそのところです。今度は西の方のエジプトが――ネコという王様ですが――これがまた少し野心を起こして、東の方にやってきた。そのときのユダの王さまはこのヨシヤです。アッシリヤが滅びたので、気をよくしてこのエジプトが少し台頭してきたわけです。何もヨシヤがこのネコと争わなくてもよかったんですが、ネコと戦争をしてしまった。そして、「メギドの戦」というのがあって、608年にヨシヤ王はこの戦争で戦死してしまう。それで、ユダの国は傾き始める。ヨシヤの死はユダにとって致命的な死です。そこで、ヨシヤの子のエホアワズというのが23歳にして607年に王位につくんですが、これは3ヶ月でもってやはりネコにやられる。

そしてこのエジプトのネコは、エホアワズの異母兄に当たるところのエホヤキムを立てる。このエホヤキムというのは傀儡王です。607年から597年まで。これはしかしながら偶像崇拝のしょうがない王様です。苛斂誅求するし、国はいよいよ貧富の差がひどくなるし、偶像崇拝だし。そこでエレミヤはこれに対して激しく、

「こういうことではいかん」

ということで、神さまの言を告げるわけです。だから、エレミヤが一番迫害を受けたのは、このエホヤキムというやつです。そこでこのエホヤキムが王についた初期において、神殿において預言をする。これが今の7章のところです。まず大体、そういうようにとっていいらしい。

●エルサレム神殿中心

2 汝エホバの室の門にたち 其処にてこの言を宣て言え エホバを拝まんとてこの門にいりしユダのすべての人よ エホバの言をきけ

そこで、この「門」というのは、外庭と内庭がありますが、この場合は内庭の門らしい。

3 万軍のエホバ、イスラエルの神かくいい給う 汝らの途と汝らの行を改めよ

エレミヤがよく言う言葉です、

「汝らの途と汝らの行を改めよ」

と。「途」というのがもちろん根底であって、それから発してくるのが「行」です。言い換えれば、宗教、信仰の世界と道徳の世界。それが「途と行」。道というのは宗教です。だから、私は

「キリスト道」

と言う。「教」とは言わない。孟子の言葉には「教」という言葉を非常に深く言っているところがありますが、まぁいつか引用してもいいですけれども。

「汝らの信仰と行為とを改めろ」

という。私はこの「道」という字を非常に深く、非常に大事にします。奥田君の名前が「昌道」、昌（さか）んなる道というからいい名前だ。

さらばわれ汝等をこの地に住ましめん

問題は、本当に信仰に立っているか、それによって本当に行為しているか、

「信行一如」

であるか。それならば、お前たちにこの地を与えると。

4 **汝ら是はエホバの殿（みや）なりエホバの殿なりエホバの殿なりと云う偽（いつわり）の言をたのむ勿れ**

と三回言われているでしょ。「ヘイカル　ヤーヴェー」「エホバの殿（みや）」という。「ヘイカール」という言葉は本来、「宮殿」の意味です。パラスト、王様の宮殿。それから第二番目がこの「神殿」に使われている。むしろ本来は「宮殿」に使われている言葉です。第二番目が「テンペル」(Tempel、寺院）の意味です。英語ならば「テンプル」(temple)。

「宮殿」の意味で使われているところは、列王紀略上の21章とか、下の20章とか、イザヤ書39章7節とか、詩篇45篇16節、これは王様の結婚のところだ。

「神殿」の意味で使われているのは、アモス書8章3節、イザヤ書の有名な6章1節のところ、神殿に何とかが満つるというところ。その他もろもろです。エレミヤでいうと、エレミヤの24章1節と、50章28節、それから51章11節に出てきます。

「ヘイカル　ヤーヴェー」「エホバの殿（みや）」という。これは

「神殿である、神殿である、神殿である」

と非常に神殿を重んじてそう言うけれども――何もエレミヤは神殿そのものをむげに否定しようとしたわけではないので――神殿というからには、神殿をそんなに重んじるなら、お前たちの日常生活が本当に道と行い、信仰と行為がちゃんと出来ていれば、それは神殿を重んじてもいいけれども、そっちの方がいい加減で――いい加減どころではない――非常に間違っていて、そして

「とにかく神殿にお参りさえすればいい」

というのは、とんでもない話だというわけで、神殿攻撃をやるわけです。

さっきいったヨシヤ王の宗教改革、それは神殿中心にしたことは必ずしも間違いではないけれども――それは東西古今の宗教がすぐ陥りやすいところの欠陥です――お寺参りをしたってダメなんだ。とにかく、ヨーロッパに行きましても、たくさん教会堂があるよね、おおきなカテドラルが。

「教会参りをしていればいい」

ということになってしまう。こちらでいうと、お寺参り。たくさんあるわけでしょ。特にエルサレム神殿中心の、さっき言った紀元前621年のヨシヤの申命記を発見しての宗教改革は、改革が改革にならない。エレミヤこそが今、本当の宗教改革をしようとして、

「本当の宗教改革はちがう。神殿をただ重んじたってそれは却ってダメなんだ」

というわけです。

5 **汝らもし全くその途と行を改め　人と人との間を正しく鞫き　6 異邦人と孤児と寡を虐げず**

これは、異邦人がかなり入っていますから、それを分け隔てをしてはいかんと。今のイスラエルはちょっとその点で問題があるね。

無辜者の血をこの処に流さず 他の神に従いて害をまねかずば

ということは、「偶像崇拝をするな。信仰的な害である」と。

7 **我なんじらを我汝等の先祖にあたえしこの地に永遠より永遠にいたるまで住ましむべし**

「永遠より永遠」という言葉は面白い言葉ですね。「永遠」といえばもう分かるんだけれども、「永遠から永遠」という言い方が。まぁ日本語としては「永遠」と訳して果たしていいかはちょっと別問題ですけれども。「常に変わらず」という「エヴァー」という字ですから。「from ever to ever」ということ。

●盗賊の巣

今、エレミヤに語られた5節、6節が本当に実践されていれば、世の中は問題ないわけですが、歴史の終末に至るまでしょっちゅう人類はこのような間違いをしているわけです。

8 **みよ汝らは益なき偽の言を頼む 9 汝等は盗み殺し 姦淫し 妄りて誓い**

この「盗み殺し姦淫し妄りて誓い」なんてのは、モーセの十誡の対人関係のところの一番重い罪を言っている。もう一つは「貪り」ということです。

バアルに香を焚き

というのは十誡の上の方の、

「わが顔の前に何ものをも神とすべからず」

という、それを犯しているわけです。

汝らがしらざる他の神にしたがうなれど

即ち「十誡を犯しているから」ということだ、ひっくるめていえば。

10 **我名をもて称えらるるこの室**

即ちエホバの家。この場合は「室」という字は「神殿」でなくて、「家」という字「ベート」――「アレフ」「ベート」の、ＡＢのＢというのは「家」という字ですから――「ベートエール」というのは「神の家」。「ベテル」という地名は「神の家」という字です。

「ベートエール」「我名をもて称えらるるこの室」
即ち神殿。ヤーヴェーの名が称えられる。

にきたりて我前にたち

礼拝のことです。

我らはこれらの憎むべきことを行うとも救わるるなりというは何(いか)にぞや

実存がいい加減であって、そして神殿にやって来て、「救いがある」なんて言ったって、それはダメだ、虫のいい話だ、それは大きな偽善であると。

11 **わが名をもて称えらるる此室(いえ)は汝らの目には盗賊の巣と見ゆるや**

キリストがこの言葉を使ったですね。

「祈りの家を強盗の巣にしてしまった」

とキリストも言われた。

我も之をみたりとエホバいいたもう

大体、盗人というのは洞穴に住んでいたが、洞穴から神殿にやって来てしまった。それと同じことになってしまう、とんでもない話だと。キリストのあの言葉はマタイ伝21章、マルコ伝11章、ルカ伝19章、共観福音書にみな出てきます。マタイ伝21章12節、

「12 **イエス宮に入り、その内なる凡(すべ)ての売買(うりかい)する者を逐(お)いいだし、両替する者の台、鴿を売る者の腰掛を倒して言い給う、**13 **『「わが家は祈の家と称えらるべし」と録(しる)されたるに、汝らは之を強盗の巣となす』**」（マタイ21・12～13）

同じ並行記事がマルコ伝11章17節とルカ伝19章49節です。

12 **汝等わが初めシロに於て我名を置きし処にゆき**

「シロ」というのはエルサレムの少し北の方、サマリヤの方にある。昔は、「イスラエル・ユダ」の「イスラエル」は「エフライム」とも言います。このシロが神殿礼拝の中心だったわけです。シロには契約の箱が置かれていたが、ペリシテに一遍奪われてしまった。

我がイスラエルの民の悪のために其処(そこ)になせしところのことをみよ

イスラエルとこのペリシテがエベネゼルという所で戦って、負けて契約の櫃(ひつ)を取られてしまった。これはサムエル前書4章に書いてある。そこでシロの神殿は破壊されてしまった。もうエレミヤの頃は、もちろんシロなんてのはただ寒村にすぎなくなっていた。

13 **エホバいいたもう今汝ら此等のすべての事をなす**
又われ汝らに語り　頻(しきり)にかたりたれども聴かず　汝らを呼びたれども答えざりき

悪いことをしたと。

預言者の言うことも聞かないし、神さまが呼んでも一向返事しない。もうエレミヤはこの時は既に召命をうけて預言者として立って、かれこれ20年経っている頃ですよ。

14 **この故に我シロになせしごとく我名をもて称えらるる此室(いえ)**

即ちこのエルサレムの神殿、

になさん すなわち汝等が頼むところ 我(わが)汝らと汝らの先祖にあたえし此処(ところ)に なすべし

神殿を本当に神殿とするならば、日常生活がしっかりしなければ、全然それは無意味だと。しかし、今でもエルサレムは一応その中心にはなっていますけれども、まぁ昔ほどではもちろんない。

15 **またわれ汝等のすべての兄弟すなわちエフライム**

イスラエルですね、

のすべての裔(すえ)を棄てしごとく 我(わが)前より汝らをも棄つべし

ということは、エフライム即ち北イスラエルが滅びたのは紀元前722年でしょ、アッシリヤにやられた。ですから、やがてユダも同じ運命にあう。バビロニヤにやっつけられるという、一種の預言がもう既になされている。こんなことを言ったものだから、非常にエホヤキムに迫害されるわけです。

●とりなしをなす勿れ

16 **故に汝この民のために祈る勿れ**

それだから、神さまはまた激しいことを言われた。エレミヤは一生懸命で執り成そうとするのだけれども、この「祈る勿れ」とは直訳すると、「執り成しをするな」ということ。

「汝この民のために執り成しをするな」

と。また、

彼らの為に歎(なげ)くなかれ

これは直訳すると、

「彼らのために叫びと祈りとをあげるな」

と。「声をあげるな」という言葉が使ってある。彼らのために叫んだり祈ったりする、そういった叫び祈りの声をあげるなと。それから、

求むるなかれ 又我にとりなしをなす勿れ われ汝にきかじ

「とりなす勿れ」とあるが、そこはもっと強い言葉です。

「私に対して切願するな、押し迫って願いをするな。私に懇願、切願をするな、しつこく願うな。執り成したり、切願したり、叫んだり、祈りの声をあげるな」

と。「祈り」という字は――旧約聖書で「詩篇」というでしょ、あれは本当は

「祈りの書」

という意味で、祈りの書なので――祈りには讃美もあれば嘆きもあればいろいろあるわけです。本来は祈祷書なんだ。「詩篇」という訳が本当はおかしい。「テッヒラー」という字です。要するに、

「もう彼らはうっちゃっておけ。彼らのためにいろいろやることは、私はもう聞かん。無駄だぞ」

と。そう神さまに言われてしまって、エレミヤもどうにもならん。預言者としては非常につらいわけです。エレミヤは預言者で、神さまの言葉を伝えると共にまた民のために執り成す祭司の努めがある。執り成しは祭司のすることだから、

「お前は祭司の務めをするな、激しい預言をさせるが、祭司的なことは断るぞ」

というわけです。

17 **汝かれらがユダの邑とエルサレムの街になすところを見ざるか**
を拾め 父は火を燃き 婦は麺を捏ねパンをつくりて 之を
天后にそなう

何をするかというと、そのこと自身は悪くはないけれども、

「天后」というのはバビロニヤの「イシタール」という名前の偶像です。イシタールの神さまに備えている。

又かれら他の神の前に酒をそそぎて
我を怒らす

いろんな神がいるとみえて、

エホバは妬みの神だからね、イスラエルの魂を他のものには捕らわれたくないから。イスラエルを熱愛する神を

「妬みの神」「エールカンナー」

という言い方です。

19 **エホバいいたもう 彼ら我を怒らするか 是れおのが面を 辱 むるにあらずや**

「私を怒らせるばっかりでなくて、自分自身の恥だぞ、そんなことは」と。

20 **是故に主エホバかくいいたもう 視よわが震怒とわが憤怒はこの処と人と獣**
と野の樹および地の果にそそがん 且燃えて滅ざるべし

「燃えて燃え尽きない」という強い言い方です。

これが今日やるところの範囲の大方のお話です。

●真の礼拝者

ところで、この神殿宗教について、ヨハネ伝４章を開いてください。ヨハネ伝４章は非常に大事なところで、私はドイツ語の固有名詞辞典〔「ドイツ語固有名詞小辞典」１９６４年初版、研究社〕にレンブランドの、

「サマリヤの女と井戸端で会話しているイエス」

の有名な絵を掲げた。ここの会堂にちょっとこういうのを掲げておいたら面白いなと思うくらいです。

このヨハネ伝4章はご承知の通りのわけですが、キリストがサマリヤの女と会話していて、女は水を汲みに来たが、

「自分もひとつ喉が渇いたからもらおうか」

なんてやっている。

「この水を飲めばまた渇くけれども、私は本当は渇かない水を持っている、活ける水を持っている」

と。そうしたら、女が、「どんな水ですか、一体」と。11節、

11**「女いう『主よ、なんじは汲む物を持たず、井(いど)は深し、その活ける水は何処(いずこ)より得しぞ。12汝はこの井を我らに与えし我らの父ヤコブよりも大いなるか、彼も、その子らも、その家畜も、これより飲みたり』13イエス答えて言い給う『すべて此の水をのむ者は、また渇かん。14されど我があたうる水を飲む者は、永遠に渇くことなし。わが与うる水は彼の中にて泉となり、永遠の生命(いのち)の水湧きいづべし』**

即ち聖霊のことです。

まぁえらい言葉を言った。

15**女いう『主よ、わが渇くことなく、又ここに汲みに来ぬために、その水を我にあたえよ』16イエス言い給う『ゆきて夫をここに呼びきたれ』**

云々といって、この会話が進んでいくわけです。そして、初めて自分の素性をピタリ言われて、参ってしまって、そして、

「預言者とみとむ」

なんて言い出す。

20**我らの先祖たちは此の山にて拝したるに、汝らは拝すべき処をエルサレムなりと言う』**

サマリヤの女ですから、

「あんたはユダヤ人だが、私たちの先祖はこの山即ちゲリジムの山で拝した。あなた方は拝すべきところはエルサレムだという」

と。この「べき」は非常に強い字ですから、

「礼拝する所はただエルサレムだけだとあなた方は仰る」

と。即ち、ユダヤ人がエルサレム神殿中心ということは、特にエレミヤの後で国が滅びてから、第二神殿が建ってからいよいよそうなったわけですから、紀元前515年以来。

21**イエス言い給う『おんなよ、我が言うことを信ぜよ、**

私の言うことを、私に信じなさい。私に信頼せよと。

此の山にもエルサレムにもあらで、

これはキリストの宗教改革です。即ち、この山、ゲリジムの山でもなければ――キリストは、

今は旅をしていて、サマリヤに入っているんですから――この山でも、あっちの南の方のエルサレムでもないと。

汝ら父を拝する時きたるなり。

神さまを拝する時がくる。キリストはいつも神さまのことを「父」と言っていますから。

22 **汝らは知らぬ者を拝し、我らは知る者を拝す、救はユダヤ人より出づればなり。**

これはイザヤ書に書いてある。

23 **されど真（まこと）の礼拝者の、**

本当の礼拝者の、

霊と真（まこと）とをもて父を拝する時きたらん、

観念じゃないと。

今すでに来れり。

もう既に来ているんだと。

父はかくのごとく拝する者を求めたもう。 24 **神は霊なれば、拝する者も霊と真（まこと）とをもて拝すべきなり**』

この「べき」も強い。

「拝する者は霊と真とをもって拝しなくてはいかん、その他に拝する拝し方は本当はないんだ」

と。

●霊と真とをもて拝す

この「霊と真（まこと）」はさっきのエレミヤの言葉と照応すれば、「道と行い」なんです。即ち、信仰と実存。

「信仰と実存をもって拝せよ」

という。「真（まこと）」というのはただ心情的に「真実」なんていうのではない。藤井先生はそういうようにとっておられたわけですけれども。私はこの「真（まこと）」という字は、

「存在そのもののまことさ」

ということ。だからこの「真」というのは、いわゆる極言されたような、「真実」というような心情的な――心情（心状）というのは心のありさまですよ――それよりかもっと存在的だと思うんです、私は。存在的、実存的です。だから、躓いたり転んだりしたっていいですよ。しかし、

「本当に私は躓いた、悪かった」

と、すべてがあるがままの自分を投げ出しているのが「まこと」ということです、

「あるがままの自分を本当に神さまの前に投げ出す」

ことです。

キリストの福音書を見てごらんなさい。福音書に出てきて、キリストが相手にしている連中は、いわゆる道徳的にただしい人ですか。そうじゃないでしょ。みんな行き詰まったり、苦しかったり、あるいは悪いことをしたり。あの十字架上の盗賊だってそうだ。あれはしかし、

「私は悪かった。せめても覚えてください」

くらいなことを最後に言ったでしょ。あれが「真（まこと）」なんです。存在的に自分を投げ出しているわけです。まぁいろんな連中が出てくるけれども、あるいは盲者でも、跛者でも、とにかくみんな

「全存在を投げかけてキリストにぶつかってくる者」

あのぶつかりが本当の真（まこと）なんです。あれが礼拝なんです。キリストはそういうのをみんな救い上げてしまう。

ところが、まことしやかな、パリサイ人――パウロもそうなんだ、もとは。

「律法の義につきては責むべきところなき」

立派な男だ。けれども、こいつがダメなんだ。何もデタラメがいいのではないけれども、とにかく

「自分を一生懸命で投げかけてくる」

そういうのが「真（まこと）」です。

「霊」は、これは神の霊です。祈りの世界で聖霊を受けるところの御霊です。だから、この御霊と、それから自分の全存在をもってのぶつかり――また、御霊がくるところには、そういう在り方でなければいられないです――でなかったら、聖霊を偽ることになるから。

これが

「霊と真（まこと）とをもって」

ということ。「霊と真（まこと）」は実は、その意味において、二つではなくて一つということに結局なる。私が言っているところの、もうひとつ別な言葉でいうと、

「霊と砕け」

なんです。砕け、平伏し。

「霊と平伏しをもって」

ということ。御霊のあるところには、こちらが砕けてなければ、御霊は在り得ないんです。そうでしょ。真に聖霊というときには、自分がぶっつぶれていなければダメなんです。自分がぶっつぶれてなくて、聖霊なんていうことは言えない。その

「ぶっつぶれの姿」

が、今言った

「あるがまま」

という

「投げ出しの姿」
です。だから、「霊と真」というのは「御霊と砕け」ということです。
「御霊と砕けとをもって祈れ」
と。ということは結局、必ずこれは
「一つ」
でなければならない。一つであらざるを得ない。わかりますか。真理というものは、ある一つのところにしっかりと焦点を結ばなかったらダメなんです。両極を持っていいですよ。しかし、これは必ず、いわゆる中庸ではなくて、或るもの凄い焦点を、「見えざるところの焦点」をもつ。

これが「霊と真（まこと）とをもって」ということ。いいですね。だから、もはや地の果ていずこにおいても、日本であろうと中国であろうとソ連であろうと、どこであってもかまわない。要するに、礼拝する所は、神殿があったら神殿だっていい。神殿、教会、教会堂――教会堂をただ否定するのではない――神殿でも教会堂でも幕屋でも何でもいい。とにかく、それを本当に神殿ならしめ、教会堂たらしめているものは、内側にきて、霊と真とをもって拝する者、それが神殿たらしめ、教会たらしめている。

ところが、教会堂とか神殿というような、あるいはそこのパイプオルガンとか、そういったものにみんな何となく宗教的な雰囲気に魅せられて、そしてそれが宗教で、信仰の事態かと思って、

「あと六日間は適当でよろしいなんて、そういうのはダメだぞ」

とエレミヤが言っているんです。だから、

「神殿、神殿、神殿と言う彼らの言葉を受けとるな」

という。キリストはもっとはっきり言ってしまった。もちろん、キリストは神殿そのものを一面において否定はしてませんよ。

「これを強盗の巣となしている。もっと神聖にしなくてはいかん」

ということを言っておられるけれども、しかし、直線的に神殿を肯定していない。

「どこであろうと、本当に拝する時がくる。そこが即ち、野原であろうと、海辺であろうと、山の中であろうと、そこが即ち神殿である、そこが礼拝所である」

というのが本当の実存的な礼拝である。

●御霊にある砕け

内村鑑三先生が「無教会」ということを言われたのは、

「教会に行く人は悪くはないけれども、教会がなくたっていいんだよ」

ということで「無教会主義」ということが出てきた。今度はそうすると、無教会の連中が「教会はダメだ」といって、相対的にまた教会を否定しようとするような――まぁこの頃はそ

うだか何だか知らんけれども――だけれども、

「無教会主義」

なんていって一生懸命で主義を言っているうちはダメですよ。教会がなければ無教会だっていいさ。私は無教会の流れに育ってきたんだけれども、何も無教会を決して絶対視していない。どんなものだって人間のやっているものは絶対的なものはひとつもないですよ。無教会を何かサムシングにしたら、これまたダメ。教会をサムシングにしても、神殿をサムシングにしても、お寺をサムシングにしても、それはみんなダメ。だから、有れども無きがごとく、相対的な在り方というものはどれだって構わない。ただし、

「そこに本ものが有るか無いか」

だけが問題である。だから、そういう事態は、

「有れども無きが如し、無けれども有るが如し」

と。けれども、一番大事なものは、

「本ものがそこに生きているか」

ということだけ。そうすれば、そこが神殿であろうと、教会であろうと、野原であろうと、何であろうと、そこを礼拝所とするものがある。

ルカ伝18章をみてごらん。御霊における砕けの礼拝ははっきりしている。９節、

「9**また己を義と信じ、他人を軽しむる者どもに、此の譬(たとえ)を言いたもう、**10**『二人のもの祈らんとて宮にのぼる、一人はパリサイ人、一人は取税人なり。**11**パリサイ人たちて心の中に斯く祈る「神よ、我はほかの人の、強奪(うばい)・不義・姦淫するが如き者ならず、**

又この取税人の如くならぬを感謝す。12**我は一週のうちに二度断食し、凡て得るものの十分の一を献ぐ」**

さっきエレミヤが言った、あの悪いことは全部していない。

献金している。

「非常に立派なのはお蔭様でございます」

なんて言って祈っている。これは自己義認者でパリサイ人だ。それ自身は悪くはないけれども、

「そういったような自己を何者かとして数えたてているようなのは偽善者だ」

と、キリストは言うんです。神さまの前に何が誇れるか。何かいいことをしても、それは神においてなしただけの話で、栄光は神に帰すればいいけれども、

「俺はいいことをした」

なんて思っていると、ひとつズレてしまう。

「右の手のなすことを左の手に知らすな」

なんて、キリストは言っているんだから。

13然るに取税人は遥に立ちて、目を天に向くる事だにせず、胸を打ちて言う「神よ、罪人なる我を憫みたまえ」14われ汝らに告ぐ、この人は、かの人よりも義とせられて、己が家に下り往けり。おおよそ己を高うする者は卑うせられ、己を卑うする者は高うせらるるなり』（ルカ18・9～14）

「己を卑うする」ということは、何も形式的なことではないので、この砕けた霊の祈り――砕霊の祈り――砕けの魂のところに御霊は臨むんですから。これはイザヤ書57章15節です。

「15至高く至上なる永遠にすめるもの聖者となづくるもの

というのは神さま。

如此いい給う 我はたかき所きよき所にすみ 亦こころ砕けてへりくだる者とともにすみ 謙だるものの霊をいかし 砕けたるものの心をいかす」

と。もう、

「ぶっつぶれ、破れ、砕け」

まぁいろんな表現で私は言いますけれども、そういう気合が分かってくれなかったら、もう来なくたっていいよ、この集会に。もったいないから。いいかね。それでなければダメですよ。あなた方は、そうでなくて、よく力が来るね。来たような顔しているのかな。本当にそれでなかったら、私には力は来ないです、本当の力は。

「御霊は砕け、御霊の砕け、御霊にあるところの砕けの祈り」

です。「霊と真」なんて難しいことを言わなくたっていいよ。「霊と真」なんてキリストが仰るもんだから、「さぁ～て？」なんていって一生懸命でやっている。

「御霊にある砕け」

であります。だから、もう私は非常に簡単明瞭な註解を書いてやろうかと思っているんだ、そのうちに。もうくだくだたくさん書く必要はない。だから、「ハレルヤ」誌なんてのは４頁以上書かないから、絶対に（笑）。もう一枚でたくさんだよ。そのかわりしっかり祈りをこめて読まなかったら、私の文字には無駄がないですから。いいですか。

●神および羔羊はその宮

「神殿」について新約で、ヨハネ伝４章だとか、今のルカ伝18章だとか引用したが、もう一つ引用したいところがある。誰か答案を書いてごらん。どこにあるかね？　……さぁ困った。時にはこうやって聞く方がいいね、あまりしゃべってばかりいないで。どれだけ聖書を読んでいるか分かるから。そういうのはパッとこなくてはいかんよ、閃きのごとくに。閃きが足りないね、あなた方。みんな落第生だ。武蔵野集会に来たらもう少し及第生がいてもいい。そんなところを方々捜していたってダメだ、祈らなくては。祈っていたら閃きがくるから。そのかわり普段、聖書を読んでいなくてはダメだよ。……じゃ、答案を書こうかね。聖書の一番終わりだよ。黙示録21章22節、

「22**われ都の内にて宮を見ざりき、**
とある。神殿なんかありませんよと。
主なる全能の神および羔羊はその宮なり。23**都は日月の照らすを要せず、神の栄光これを照らし、羔羊はその燈火なり。**」
キリストが即ち神殿である。それはもうひとつ言えば、いくらでもまだあるよ、この福音書の中に。
「三日にしてこれを建てる」
と言ったでしょ。「私は活ける神殿だ」と。
「**お前たちはこの大きな神殿を見てびっくりしているけれども、冗談じゃない、これは今に倒れてしまう。一つの石も石の上に乗ってないぞ。私はそいつを三日で建てる**」
と言ったものだから、「これは何事を言うか」と思ったわけだ、みんなは。ということは、キリストは十字架にかかって、三日目に甦える。即ち、自分が活ける神殿であるという。それで、パウロがまた言ったでしょ、
「**お前たちは即ち御霊の宮である、神殿である**」
と。コリント書簡のあの言葉、
「我々が即ち神殿である」
ということ。それは
「キリスト・イエスが神殿である」
が根拠ですよ。キリスト・イエスが神殿であるのは、キリストの言葉の中に既にある。それは黙示録のここにはっきり出ている。終末の世界において神殿はもう要らない。と同時に、我々の現在が既に終末的現在ですから。だから、エレミヤが言ったとおり、
「**神殿なり神殿なり神殿なりなんて言っているな**」
と。問題は教会堂でも、神殿でもない。無教会は神殿否定のその角度はよかったけれども、しかし、無教会の一人びとりは
「自分が本当に神殿である」
ことを言っているかというと、言っていないじゃないですか。それは聖霊が来ていないから。聖書を解釈するときには言うよ一応、註解を書くときには。だけれども、そうじゃないよね、註解の答案ではだめだ、本当にそれが告白となっていなくては。
でありますので、「まことの礼拝」が、さっき言ったルカ伝18章の取税人のあの祈り。取税人というのはとにかく嫌われるのだから。この「砕けの祈り」は即ち、御霊が本当に「御霊の神殿」となる。だから、本当の意味において我々は神殿宗教なんだ。自分自身が神殿となったときに、初めてそれが神殿宗教である。そうでないいわゆる神殿は否定します。
「それでは、世界中の教会堂や何かをぶっ壊せ」

なんていうことではない。それはそれぞれあって結構ですけれども、それを活かすものは内側である。いわゆる革命的な破壊主義はいかんですよ。革命的な破壊主義はいかんけれども、本当にそれを活かすものは内側の世界であります。キリストも何も神殿を破壊しようと思ったのではない。神殿をいい加減にしているやつはみんな叩きだした。

「祈りの家ではないか」

と。それは神殿を尊重していらっしゃるけれども、しかし、

「神殿を本当に尊重するものは自分たちの実存だ。霊と真の祈りだ」

と。そうなったら、何も神殿だけが神殿ではない。どこであろうと構わない。それは結局、

「神殿の主体はお前たち自身だ。いわゆる場所ではないよ」

ということ。即ち、神殿を運んでいるんだから、しょっちゅう。カタツムリが家を持って歩いているのと同じこと。我々はカタツムリみたいなものです。神殿という殻を背負っている。それだけの神殿を持たないカタツムリなら死んでしまうよ、本当は。殻のないカタツムリなんてのはナメクジになってしまう（笑）。ナメクジ的存在でなくてカタツムリにならなくては。ただしその殻はただ殻ではいかん。カタツムリの殻だってちゃんと生きているんだ、血が通っている。

何しろ、黙示録のこの素晴らしい言葉がパッと閃いてこないでどうするか。どこを読んでいるんだ、みんな。それで、我々はそういう生きた

「活ける神殿、御霊の宮」

です。パウロの言葉を見ておこう。コリント前書3章9節にも似たような言葉がある。

「9**我らは神と共に働く者なり。汝らは神の畠（はたけ）なり、また神の建築物（たてもの）なり。**」

それから16節に、

「16**汝ら知らずや、汝らは神の宮にして、神の御霊なんじらの中に住み給うを。**御霊が住んでいらっしゃるから、神の宮であるということです。

17**人もし神の宮を毀（こぼ）たば神かれを毀ち給わん。それ神の宮は聖なり、汝らも亦かくの如し。**」

聖霊の世界だから。だから、本当の自由があるわけです。

「御霊のあるところに自由あり」

というのは、常に現在している世界だから、何も他に求める必要はない。

「極楽は東にあらず西になし来た道さがせみんな身にあり」

という。極楽は東にも西にもないぞ、来た（北）道を捜してみろ、どこにもないぞ、みんな身（南）にあるぞと。「南」ではないよ、ただ言葉をかけて言ったわけです。天国は同じことであります。神殿は同じことです。では、おしまい。